

「嘆きと慰め」
マタイ 2：13-23

ヘロデ王という人は、とても猜疑心が強く残忍な性格であったようです。彼は少しでも自分の地位を脅かしそうな存在は容赦なく殺害しました。そんなヘロデにとって、「ユダヤ人の王として新しく生まれた者がいる」などという知らせは、新たな脅威でしかありません。当然、ヘロデは暗殺を企てます。そこで、新しい王の居場所を突き止めようと博士たちに「見つかったら知らせるように」と命じて、ベツレヘムへと送り出したのです。

けれども、彼らからの報告は、一向にありませんでした。怒りに狂ったヘロデは、ベツレヘムとその周辺の子二歳以下の男子、つまり王として生まれたかもしれない可能性のある男の子を手当たり次第、皆殺しにしたのです。この時、イエスさまはというと、ヨセフが見た夢のお告げのおかげで、家族3人エジプトに避難したため危機を逃れることが出来ました。

この出来事を読むと、私はなにか釈然としない思いがあります。なぜ神さまは、イエスさまだけではなく、子どもたちも救われなかったのか。他に方法はなかったのか。そう問わずにはいられません。けれども、その問いに対して聖書は堂々と語っています。たとえそのような絶望的な世界であっても、一人のみどり子が与えられたということ。その御子を愛する者は、決して絶望することのない望みをもって生きることが出来るのだということ。

マタイは預言者エレミヤの預言を引用します。それはエレミヤ書31章15節の御言葉です。「主はこう言われる。ラマで声が聞こえる／苦悩に満ちて嘆き、泣く声。ラケルが息子たちのゆえに泣いている。彼女は慰めを拒む／息子たちはもういないのだから」。

ラケルは、イスラエル民族の祖先であるヤコブの妻です。つまり、ラケルはイスラエルの民の母と言っても良いでしょう。そのラケルが、バビロン捕囚のゆえに多くの民が死んでいったことを嘆きとして歌っている。そして、それと同じ嘆きが今起きているのです。

しかし、この後にはこう続いています。「主はこう言われる。泣きやむがよい。目から涙をぬぐいなさい。あなたの苦しみは報いられる、と主は言われる。息子たちは敵の国から帰って来る。あなたの未来には希望がある、と主は言われる。息子たちは自分の国に帰って来る」。

このラケルの嘆きは、嘆きのままでは終わらない。涙がぬぐわれ、苦しみは報いられるということです。それが、エレミヤが告げたことでした。

けれども、マタイは後半部分を引用していません。なぜ記さなかったのでしょうか。おそらく敢えてそれを記さなかったのではないかと考えられます。なぜなら、神なき望みなき世界に与えられる神さまの慰めと救い、それこそが、マタイが描こうとしたイエスさまの生涯そのものだったからだと思うからです。

ヘロデの幼児虐殺事件は、まさにこの世の暗闇を表す事件でありました。このような悲惨は、今も世界の各地で起きています。しかし聖書は、そのような現実のただ中にイエスさまは生まれた。この悲惨な現実の中で嘆く母親たちにも希望を与え、涙をぬぐってくださる方としてイエスさまは来られた。聖書はそのことを告げているのです。

私たちが闇の中で嘆き、不安と恐れに支配されそうになってしまいます。しかし、イエスさまは来られた。闇を照らすまことの光として来られた。この方と共にいるならば、私たちは光の中を歩むことが出来るのです。自分を人生の主人としないで、イエスさまを「わが主、わが神」とより頼む時、私たちの中に光が宿るのです。